館報

No. 2　1975. 2

大阪外国語大学附属図書館

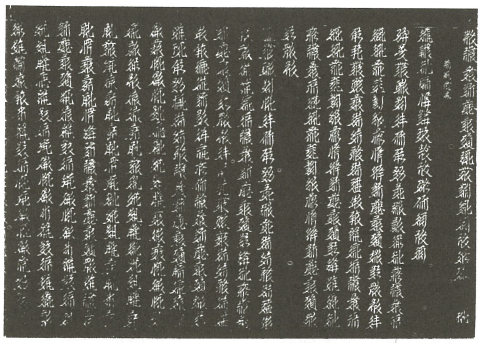
石浜文庫について

教授　外山軍治

石浜文庫というのは、本学の所蔵に帰した故石浜純太郎博士（1888～1968）旧蔵の図書に対して、本学附属図書館がとくに名づけた称呼である。その中には、昭和45年３月博士の遺族より購入したものと、その後、遺族より寄贈をうけたものとからなっており、両者を併せて博士蔵書の全部ということになる。その冊数、内訳は次の通りである。

漢籍	20,262冊
和書	9,021冊
洋書	3,269冊
雑誌	9,743冊

博士は明治21年大阪市に生まれ、同44年東京帝国大学文科大学支那文学科を卒業後、郷里に帰り、家業である製薬業を継承したが、その方には身を入れず、もっぱら学究としての道を歩んだ。元来漢学畑に育った人であるが、中国の伝統の学問にはあきたらず、新しい学問の分野の開拓を志向して、中国周辺諸地域の言語・文化に関心を示した。博士が、大正11年創立当初の大阪外国語学校（本学の前身）に聴講生として入学し、二年間モンゴル語の習得につとめたのも、その一つのあらわれである。



六十四百第卷經若般大

それと前後して、当時京都帝国大学文学部東洋史学の教授であった内藤虎次郎（湖南）博士に弟子の礼をとり、以来いわゆる京都学派に属する諸学者との交友が生じた。その頃の京都学派は、敦煌石窟より発見せられた書籍文書の研究に没頭していたが、博士もまたこの流行に投じて敦煌学一方の重鎮となった。そしてその御学問分野も、漢学から発して言語学・歴史学の世界に進入し、領域も、中国・西域・インド学にひろがり、考証の精緻なことと学識の該博なことをもって名を馳せるに至った。

博士はまた、大阪の町人学者の伝統をうけつぎ、市井の学者であることに誇りをもちつづけた。生活のために学校の教師になる必要もなかったが、またなろうとも考えなかった。博士が人々から羨望せられたのは、製薬会社の経営は他人にまかせ、余裕のある環境で学問の道一筋にゆくことができたことである。そして、書物を愛した先生は、このような好条件を利して蔵書の数をふやし、学界屈指といわれるほどになった。今日本学に帰している石浜文庫がすなわちこれであって、博士が半世紀以上にわたって収集した苦心の結晶というべきものである。

では石浜文庫にはどのような書物が、どのようにして収められているのか。一わたり概説してみよう。

まず第一に、西夏語、モンゴル語文献などに稀覯書というべきものが含まれているほか、博士の造詣の深い、モンゴル語・満州語・西夏語・ウイグル語・チベット語等に関する資料が数多く収められている。これはこの蔵書の誇るもっとも大きな特徴であろう。

つぎに漢籍は、博士が元来漢文学を修めた人だけあって、その収集は経・史・子・集の各部門にわたって層の厚さを示している。とくに博士が私淑していた羅振玉・王国維をはじめ、中国近代諸学者の業績が、哲学・史学・語学・文学の各方面にわたって網羅されている。中でも、文字学・

金石学・音韻学・目録学等に関する文献が充実していることは心強い。博士が新しい学問の動向に敏感であったことはさきに述べたが、殷墟書契関係文献や、敦煌学関係の文献はほとんどもれなく収蔵せられている。

ところが、博士はこのような著名な蔵書家ではあるが、善本と称せられる、板本のよいものはあまり入っていないのである。これは博士の収書の方針がそうさせたのであって、石印（つまりチープエディション）主義であつめるのだということを公表していたと聞く。実は、京都には内藤博士や、博士よりも少し年少の神田喜一郎博士（現日本学士院会員）のような善本の収蔵をもって鳴る人々がいて、とうてい太刀打ちができないので、あっさりあきらめてしまったのかも知れない。しかし、石印主義で集められたことが非常に効果的であった。大学図書館としては、板本のよいものよりも、石印本であっても収集のひろい方が結構である。但し、善本の部類に入らないでも、今日入手不可能な板本が非常に多く含まれていることをつけ加えておかねばならない。

それとともに、博士は、いわゆるゲテものといって、当時の帝大などでは購入をはばかる種類の書物には、とくに目をかけて集めている。これは、今日になっては非常に貴いことで、石浜文庫の特徴の一つはこの点にある。

洋書の収蔵は実にすばらしく、歴史学・言語学の分野にわたって偉容を誇っている。博士は、大正8，9年頃から昭和12，3年頃までの間に、丸善書店を通じて輸入された東洋学関係の洋書は、ほとんどもれなく買ったという噂がある。これはほんとうにその通りであったようである。その領域も、東アジア・中央アジア・西南アジアにわたっており、ことにスタイン・ペリオ・ヘディンら、二十世紀初頭に行われた中央アジア学術探検隊の報告書の類は遺漏なく集められている。また博士がロシアの東洋学については該博な知識を有せられたことは有名だが、関係文献の収集においても他の追随を許さない。その他、単行書のほかに、欧米の東洋学者から数多くの論文抜刷を寄贈せられているが、中には全く得難い貴重なものが多い。

和書においては、明治、大正、昭和三代にわたる東洋学・言語学・仏教学関係文献が収められており、その収書は博士逝去の昭和43年に至るまで、断絶することなく続けられているのは敬服に値する。

そのほか、日本・中国・欧米の学術雑誌のバックナンバーの種類も多く、主要なものや、発刊の古いものはほとんどそのすべてを見出すことができるのである。

さらに看過することのできないのは、博士が強い関心をよせていた近世大阪の文化史関係の文献が多いことである。その質量ともに他の追随を許さないであろう。

またその収蔵は中国書画関係の出版物にも及んでおり、中国・日本で出版せられた複製本はほとんど全部入っていて、博士のひろさをしのばせる。博士は雑学をもって自ら持しているところがあったが、いろいろな書物を蔵していて、大衆小説の類にまで及んでいる。博士の遺族は、これが父の学問の特徴なのだから、全部一括してめんどうをみてもらいたいと希望している。

さいごに、この石浜文庫の整理分類のことに言及しよう。まず、昭和43年から44年にかけて、数名の熱心なアルバイトの手もかりて、急いで所在目録を作製した。文部省から購入費の交付を受ける段階ではこれが非常に役立った。45年3月に購入がおわり、石浜蔵書はいよいよ本学のものとなり、こんどは整理分類の段階に入った。館員の手によって、個々の書籍の整理が続けられた。帙のないものは帙をつくった。それでは費用がかさむので簡易なボール紙の帙で我慢するものもあった。腐蝕が進み、今のうちに写真をとっておかねばならないものはつぎつぎにとった。うら打ちすべきものはうら打ちした。それらの費用については、教授会会計施設委員会の配慮によって、連年、教官研究費の中から割愛をうけてまかなっている。その仕事にあたるべき館員の手が足りないという事情もあるが、徐々にしかし適確に作業は続けられている。

また何とかして早く文庫を利用できるようにと考え、所在目録を作製するときにつくったカードを分類配列し、それを写真印刷に付して、仮り分類目録を急いだ。また、その後、寄贈を受けたものについても、所在目録がつくられた。

一方、本格的な目録編纂をめざして、石浜文庫目録編纂委員会がつくられた。当時図書館長であった私が委員長となり、辻本春彦・荒井伸一・橋本勝・村田忠兵衛・伴康哉・勝藤猛および岡崎正孝の諸氏が委員として加わっている。分類困難な書籍の内容を検討して、しかるべき部門に入れるということは大切な仕事である。私のことはさておき、委員諸氏は、頻繁に図書館に立ち寄り、そのような作業に協力を惜まない。とくにモンゴル語関係文献については、荒井・橋本両氏の努力によって、著しく進捗の度が高い。しかし、正式の目録ができるまでには、まだ相当の時間と人力とが必要であろう。私は今年四月、停年退官して本学を離れる。私の在任中にある程度にまで進めておきたかったが、甚だ残念である。

なお移転に際しては、石浜文庫を収容できる充分なスペースをとり、その場で閲読できるような設備をつくってほしい。本学が石浜文庫をどのように活用するかは、学界注視のまとになっている。宝のもち腐れだなどといわれないようにしたいものである。博士遺族は博士と本学との深い因縁もさることながら、本学によってもっともよく活用してくれるであろうと期待して、一切を本学に託されたという。遺族の期待に答えることが、また博士の遺志にそう所以であると思う。

石浜純太郎先生を憶う

教授 村　田　忠兵衛

石浜文庫の蔵書数は、石浜先生の御生前から、専門家の間に、大体五万冊位かと推定されていた。五万冊という蔵書は、個人の所有としては勿論異常な分量であるが、現在は大阪外大附属図書館の架蔵するところであるから、大学図書館レベルで再評価した場合は、単なる量だけから云えばさほど驚くべき分量ではないのである。問題はあくまでその質である。或いは質と量との相乗価値である。専門家の間で、石浜文庫が、羨望垂涎の的となっていたのは、量に加うるにその質に於てであった。

石浜文庫は、石浜純太郎博士が一代七十九年の大半を賭して貫かれた東洋学者としての生涯の全貌を示すもので、即ち博士の世界的水準に立った学問のレベルを示すものなのである。単なるブックマニア、好事家のコレクションと同一視すべからざるものであって、それは専門家の間では昔から申すに及ばぬこととされていたことでもある。

先生の学問は、漢学から出発して所謂「支那学」の全域に及び、まさにその周辺地域の満蒙中央アジア、西蔵印度にひろがり、さらに東南アジアから西南アジアに渉ったもので、文字通り「東洋学」全般に攻学の範囲を及ぼされたわけであるが、世間の通例では、範囲が広くなれば、それだけ深さに於て欠けるものとされているが、石浜先生の場合は、どの分野に於ても、基礎から着手するという真摯な学問的態度を堅持して行かれたのである。この事を如実に物語るものは、先生の蔵書に於ける夥しい言語学関係の書籍である。文法辞書教科書の類を出来る限り手広く蒐集して、当該地域の言語から、まず学修して「原語」で「原典」を読破して、そこに御自分の学問の基礎を構築するという態度を堅持せられた証拠である。これは日本に於ける東洋学が西洋に於ける斯学に比し、稍立ち遅れていた明治時代に成人された先生の自覚と発憤を示すもので、西洋の斯学の大家は、例外なく原語による原典の研究から学説を構築して令名を馳せたのに対して、日本の啓蒙期の学者は、そうした西洋の大家の後塵を拝して、その蹤跡を逐うに汲々とし、自ら発憤して、彼らの方法に学んで、原語原典から独自の立脚地を得ようとする心構えに乏しいことを、石浜先生は常に慨歎しておられたのである。

先生の著書はその冊数に於ては、必ずしも多い方とはいえない。単行本として世に流布しているのは、四冊か五冊であろう。しかし、先生が折に触れて執筆された小篇の論文は可成り夥しい分量に達している。しかしこれは惜しむらくは、まとまった「論文集」の形になっていないのである。私をして卒直に云わしむれば、この短かい論文の中に、より純粋に、先生の学問的態度なり、方法なり成果なりが窺知されるのであり、後日先生の「全集」が上梓されれば、この点が一般に認められるに至るであろうと思う。

先生は万巻の書冊に埋れて生涯を送られたが、ペンを執って論文を書くことに於ては、極めてつつしみ深く、御自分の独自の成果を示すにとどめ、「誰でも知っていること」を、わざわざ自分が書く必要はない、という態度を終始一貫堅持していられた。その点、先生は世上に謂うところのブックメーカーではなかったのである。

今にして思えば、先生が「そんなことは誰でも知っているさ」といわれた事柄でも、実際は、余り誰でも知っていない事柄が多く、先生のレベルではそうであったかも知れぬが、浅学寡聞の我々にとっては「もっと書いて置いて貰いたかった」事柄も多々あったわけである。

巨大な石浜文庫の書棚の前に立って、しみじみと想望するのは東洋学という学問の深山幽谷の奥へ黙々と分け入って行かれた先生の孤高ま後姿である。

石浜文庫に想う(1)

教授 荒　井　伸　一

「必要な書物は見つけた時にすぐ買っておく事です」と仰言った石浜先生のお言葉そのままに、これが個人の蔵書かと驚く程多くの貴重な図書が石浜文庫として誕生し、今、図書館でその整理が進められている。一昨年の夏季休暇に週に一度、橋本氏と二人書庫に入り、モンゴル関係の整理のお手伝いをした事があった。ロシア語、モンゴル語、満州語、チベット語で書かれた本の表題をローマ字で転写し、日本語に訳出するだけの作業であったが、辞書を片手に、調べども書けども遅々として渉らず、十分たのしみ乍らも、書架を見上げて何度か嘆息した事を覚えている。非常に多くのシベリヤ関係の書物がある事をその時に知った。晩年、先生は「蒙・中・露文化交渉史」を講義されていたが、このあたりにも余人には真似の出来ぬ先生の該博な知識と学問の世界がある。

十数年も以前になろうか。東京外大の附属図書館を訪れ、書庫をみせていただいた事があるが、収納された関係図書は質量共に大阪外大のそれと、たいして変わるところがなかった。語学科において購入される本は、それぞれの語学科の志向する教育内容、或は購入者の専攻対象が表われていて興味深いが、当該言語と地域的、言語的に相関連する周辺地域及び周辺言語の図書蒐集がどうしてもおろそかになるきらいがある。その意味で本学図書館は石浜文庫を得た事によって、満州語、チベット語等、モンゴル以外のアルタイ語族の図書・文献が数多く加わり、学術的には勿論領域面でも一層の充実を果したと言えよう。文庫の一冊、一巻について目録完成後、東洋文庫その他の図書館所蔵の図書との照合、校合の結果にまたねばならないが、おそら

く我が国で唯一書といわれるものも出てくるのではなかろうか。モンゴル文経典、その他破損図書の補修が急がれるのもその為である。

モンゴルのみについて言えば、文庫の内容は概ね、言語、歴史関係の図書、論文が主であり、時代的には1950年以前に出されたものが殆んどである。しかし内・外蒙で革命後出版されたものに乏しい。

二十年以上も前のことである。ウラル・アルタイ学会の席上「今何を教えているのか」と石浜先生がお聞きになるので、「毛沢東の新民主主義の蒙訳です」と答えたところ、「それしか無いのかね」とお叱りを受けた事があった。モンゴルの新しい語彙、語法を求めていた私には大変ショックな出来事であったが先生のモンゴル学は矢張り「元朝秘史であり、「アルタン・トプチ」、「蒙古源流」そして「華夷訳語」であって、凡そ practical なものとは縁遠い存在であったように思われる。しかし、ある時期に於ける我々の図書購入の欠陥がその面にあった事を思えば、石浜文庫が十二分にそれを補足充実してくれた事に心から感謝せねばならないと思う。

石浜先生の蔵書をめぐって

西田龍雄

大阪近辺に住んでアジアの言語を学んだ者は、何らかの形で石浜先生のご蔵書の恩恵にあずかることが多かった。ご専門の中核であったアルタイ語関係の文献はもとより、ご蔵書の領域は、東南アジアのいろいろの言語にも及んでいた。云うまでもなく、西夏関係の資料は、当時としては、石浜先生のもとに、もっとも多く集まっていたことは間違いなく、チベット学関係の書物も、実に多種類にわたって、お手許に揃っていた。それらのご蔵書が、いま石浜文庫として、本外国語大学の図書館にそのまま受継がれ、広く一般に利用される日も近いことは、誠に意義が大きい。

私が、石浜先生のご所蔵本を、ぼつぼつ利用させていただくようになったのは、昭和23年頃からである。一番最初は、やはりチベット語関係の書物であったと思う。Hannah の *A grammar of the Tibetan language* であったろうか、Jäschke の *Tibetan grammar* であったろうか、今ははっきりと憶えていない。ハンナの文法書は、口語にもよくふれた特色のある内容の好著で、大へん役に立ったが、その書物は限定出版であって、一冊ごとにカルカッタ大学の限定番号がついていた。のちに、インドの書店が残部を放出したためか，わりに出廻って、私も一本（No. 347）を入手し、研究室でも購入したが（No. 511）、当時はなかなか見難いものであった。エシュケのチベット語文法は、小型の簡潔な内容で、もっとも古典的な文法書である。再版以後につけられたフランケとサイモンの補遺の方が本文よりもずっと価値があるのだが、近年教科書用に刊行されたリプリントには、何故かこの補遺を含まず別のものがついている。ビルマ語関係の図書で、最初に紹介され、拝借したのは、Taw Sein-ko の *Elementary hand-book of the Burmese language* であった。その頃は、ゼロックスのような便利な複写装置がなかったので、必要な書物は手写するより外はなかった。私はよくノートに引き写した。引き写しながら憶えた。ゼロックスコピーは、確かに簡単で有難い。だがこれは利用者を安心させる効果の方が大きく、そのような実利は少ない。Tow Sein-ko の書物も、私は、後年東京の某書店から別の一本を入手した。それは第4版で、石浜蔵本とは、版が違っていた。この書物が何度も版を重ねていることを知った。ビルマ語関係では Forchammer の「ビルマ碑文集」(1892) も拝借した。これはパガン時代以降多種類の碑文を現代ビルマ文字に転写し、年代順に収録したもので、私の初期の碑文研究は、この書物を材料としている。もっとも今から見ると、他にいくつも資料が出ているので、読み誤りなど多く指摘できると思う。Forchhammer は、Indo-chinese languageのような論文も書いているが、もともとは考古学者であるために、碑文の扱い方もまともである。

住吉のお宅で拝見しただけで、いまだに内容の知らない書物も多い。強く印象に残っているものの一つに、ラテン語で書かれたチベット語概説がある。これは大きい型の部厚い書物で、著者は A. A. Georgi、正確な書名は、たしか *Alphabetum Tibetanum* であった。1762年刊行であるから稀覯中の稀覯本である。実は、これとよく似たタイトルの別の小型本がある（*Alphabetum Tangutum sive Tibetanum*）この方は、石浜先生の蔵書には含まれていなかったと思うが、やはり1773年刊の珍本で、当時のヨーロッパ人が、その頃のチベット語をどのように聞いたかが記録されていて、たいへん面白い。これは京大文学部に蔵されている。

石浜先生の「蒙夷訳語」に対する関心が並々でなかったことは、ヨーロッパの名図書館に所蔵される代表的な訳語の写真を早くから将来されていたことからわかる。私が拝借したのは、パリ国民図書館本であったが、そのほかベルリン本のロートグラフなどもお手許に置いておられた。そ

れらの写真は2部作られ、一部を内藤湖南先生に差上げられたと聞いている。今は京大の人文科学研究所に入っている内藤文庫にも、同種のノートグラフが含まれるのはそのためである。英国博物館の「緬甸譯語」もその一つで、おそらくクラプロートの旧蔵本であった原本が、いまは同博物館に見当らなくなっているから、これは極めて貴重な写真と云える。「蒙夷譯語」の来文とは、体裁が異るが、チベット文と漢文を綴じ合わせたかなり大型の写本を所蔵しておられた。ある日曜日の朝、この書物を出して来られるのをたまたま拝見したことがある。内容は何であったか知らないが、これも大へん重要な資料であるように見えた。たしか彙文堂で求めたと云っておられたように記憶する。

晩年、お訪ねした所、ネフスキーの残していった西夏文字のノートが紛失したと残念がっておられたことがあった。某氏に確かに貸したようだが本人は知らないらしいと云っておられた。そのノートは、私も一・二度見せていただいたが、ネフスキーとの約束があったのであろうか、門外不出で、ずい分大切にしておられた。それが紛失したとは、とても信じられなかった。ところが、このノート、いまはちゃんと蔵書の中に収まっているではないか。紛失したと仰言ったのは先生の思い違いか、それともその後お手許に返却されたのか、いまは確かめようがない。

ソビエトの学士院からネフスキー宛か石浜先生宛に、三回にわたって、西夏訳経典の写真が送付されて来ている。大般若巻百四十六や五部経の一部などのまとまったものもあるが他はほとんどが経題の入った巻首か巻尾に限られている。どれとどれが第一回目に送られたかは興味があるが、先生の便箋二枚に書かれたメモが残っているので、別の機会に紹介したいと思う。そのほかに「残雲軒叢稿」と表題をつけられた手記があって、ノート三冊ほどになっていた。これは、ご蔵本をめぐっての考証などを主に記録されたものである。そのノート三冊が果してご蔵書の中に残っているか否か未だ確かめる機会をもたない。

○西田龍雄氏略歴

昭23・3　大阪外事専門学校（中国語）卒業
昭26・3　京都大学文学部文学科卒業
昭26・4 ｜ 昭31・3　京都大学大学院
昭33・7　京都大学（文学部）助教授
昭37・3　文学博士（京都大学）
昭41・4　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員
昭47・2　京都大学（文学部）教授
昭47・4　大阪外国語大学講師

石浜文庫に想う(2)

助教授　橋　本　　勝

本学所蔵の所謂「石浜文庫」には和漢書、洋書併せて約三万冊に及ぶ蔵書が収められている。その分野も遥か古今東西に広がり蒙古、満州、ウィグル、西蔵、西夏語等々の諸文書は、特に貴重である。未整理のものを含めると経典、拓本類も可成りの数に達する。個人の蔵書としては真に厖大なものであり、よくぞこれ程まで蒐集されたものと感嘆するばかりである。

石浜純太郎博士の博覧多識は、その厖大なる蔵書からも充分に我々の窺い知る所であるが、その中心は、勿論、東洋学関係にある。特にロシアで出版された東洋学研究に関する学術的に重要な著書、紀要、雑誌類は、当時に於ても入手困難であったと思われるものが少なくなく、例えば当時、東部ロシアの東洋学の一拠点であったウラジオストックに於て出版された文献資料もなかなか貴重である。

博士の著書は、その数に於ては決して多いとは言えないかも知れないが、その内容には、やはり学識の広さ、深さそして厳しさが一貫して流れている。御専門は、御存知の東洋史学であるが、言語学の方にも強い関心を示され東洋諸言語の研究に関する内外の文献類も多く残されている。東京帝大在学中筆録された講義ノート類も残され、中には曽て「ウラル・アルタイ説」を唱えた言語学者、故藤岡勝二氏の講義録が見られるのも興味深い。

博士は、大阪外国語学校の元ロシア語講師であったネフスキー（Nicolas Nevsky）氏と親交厚く、彼を西夏語研究に没頭するに至らしめたのは、他ならぬ石浜博士であったと聞く。尚、ネフスキー氏は、大阪東洋学会より「西夏文字抄覧」（「亜細亜研究」第四号、大正15年）を出し、同書で博士は、序文に代えて「西夏遺文雑録」を書かれている。博士は、正に日本に於ける西夏学の草分けでもあった。

同博士の著書の一つに「東洋学の話」（創元社、昭和18年）がある。これは、元々、御自身が方々で講演されたものに補正を加えて一書にまとめ上げたものであり、一般読者にも読みやすく書かれているが、言わば「石浜学」の一端が軽妙に描かれて居り、その学風を知る上で真に興味深い好個な書物である。そこには「敦煌石室の遺書」、「胡語経典の話」、「西域出土の西蔵本」、「西夏語研究の話」等々が収められ、東洋学の雄大な広がりを眼前にする思いがある。

石浜文庫のカタログは、既に仮目録として出来上がって居り学外の学者・研究者も注目する所となっている。更により完備した目録の出版が今後に期待される。そうなればその価値は、更に広く増大するであろう。「石浜文庫」は特に本学の東洋学研究に大きな便宜を与え且つ厚みを加えた。正に本学に於ける「東洋学」の一大宝庫と言っても過言ではあるまい。

故石浜純太郎博士の洋書について

石浜純太郎博士がご逝去（1968. 2. 11）されてから、早くも満七年ほどにもなる。本学に収められた先生の全蔵書は殆んどその分類整理を完了し、資料の一部（西夏語等の特殊言語部門）の未分類、その他破損本のマイクロ化等の処置、書翰ほか原稿ならびに雑書類の整理を残すのみとなってきており（正しく云えば、今后の処理に非常な人手と予算が必要であるが)、正式の同文庫目録を作製する準備段階へと入りつつある。この辺で殆んど東洋学の全領域に亘っている漢籍類、和書類の紹介は他の先生方にゆずり、可成り重要で貴重な洋書の資料のある中から主要なもののみについて事項別に知って戴くのも将来の文庫利用に多少とも稗益するところがあればと思料して敢て説明する次第である。

扨て、これらの主要な洋書を概観するに全数量 1,433点以上ある中では(勿論、専門的な稀覯書類の著名なものについては本学の専門の諸先生方にその解説をお願いするとして、これらの図書資料は省略しているが)、内容的に云えばやはり歴史学、言語学の分野が圧倒的に多く夫々に 400点以上ものまとまった数量があり、なお稀覯書あるいは貴重書と目されるものが相当数含まれ、貴重な図書資料の宝庫たるにふさわしい観を呈している。しかもその領域たるや東アジア、中央アジア、東南アジア、西南アジア等に亘っていて、スタイン、ベリオ、ヘディン等の二十世紀初頭に行われた中央アジア学術探検隊の報告書の類は勿論悉く集められている。

因みにこれらの主要なものについて分類別に詳述してみると、普通一般書については極めて考証学的多岐に亘るものが多い。即ち、総記類として78点以上のものがあり、一般図書目録・全国書誌に入るもの13点、選定書目・専門書誌は21点、英語による諸論文10点、その他34点という事項別になっている。哲学の類として 201点以上のものがあり、インド哲学のサーンキヤ学派のものが12点、宗教では中国宗教史、中国宗教事情に関するものが15点以上、仏教史に入るものでは、日本、中国・西域、南方地域の領域のもの54点を数え、仏教教理・仏教哲学と目されるもの14点、経典に入るもの12点以上、キリスト教およびその教史に入るもの16点、聖書としては詩歌書・新約聖書・福音書等あわせて15点以上、その他63点という事項別になっている。しかもこれらの中には仏教史・キリスト教史に夫々1804年、1767年、および1590年という古い貴重書も含まれている。歴史の類に関する 448点以上のものには、アジア史関係のもの26点を数え、中国史に入るもの 117点以上もありさすがに最も多く、インド史の15点、西南アジア史16点、アジアロシア史に関するもの26点、更にはアジアの地理に関するもの実に 165点もの多きにのぼり、ヨーロッパの各国の地理に関するもの15点、その他68点になっている。

更に社会科学の類では 119点以上の数量があり、稀覯書、貴重書に数えられるもの５点もあるという盛況であり、政治・経済・社会文化諸事情に関するもの27点、政治史および各国の政治に関するもの、経済史、経済体制、経済事情に関するもの、および社会学に関するもの等が24点以上にも達し、伝説、昔話（民話）に関するもの、ならびに民族学（文化人類学）に属するものもさすがに多く、36点を数えており、その他32点といった割合である。又、自然科学の類では少なく16点で、事項別では医学関係のもの８点、その他といったところである。工学の類は４点のみで、産業・交通の類でも僅か17点という状態である。芸術・諸芸の類では総計26点で、芸術史・美術史（芸術の様式）が９点もあり、写真術が４点、その他13点という風である。自然科学～芸術の類の中では稀覯書・貴重書と目されるもの17点以上も計上され得るのである。

言語を基調としている本学にとって最も関係の深いものは、何といっても、矢張り、語学・文学の類に注目せざるを得ない。これらは語学の分野では 414点、文学では 110点となっている。まず言語学に関するもの９点、言語哲学・言語学史・言語学会（団体)(会議）等に関するものは勿論、音韻学、音声学、文字学と目されるもの７点、語源学、語義学、文法学、言語形態学ならびに比較言語学に関するものが数カ国対訳辞典とともに10点以上もあり、続いて言語史に関するもの７点、その他言語に関する参考書誌・論文・逐刊物・言語教育・研究・指導法等の資料が10点以上もあり、日本語に関する音声・音韻、文法・語法、方言・俚語の図書が約４点、および琉球語の図書若干となっている。中国語に関するものは、語史・学会会議、および辞典が11点、音韻・文字、音声・音韻、語彙集、文法・語法、作文・文体、会話、方言・俗語に関するものが10点となっており、呉語・上海語、広東語等が４点となっている。特に注目すべきは、東洋諸語に関するものでその主要なものだけでも 240点近くもあり、チベット語東南アジア諸言語の中殊にチベット語、ヒマラヤ語、西夏語等の貴重なものが27点以上あり、アルタイ諸語の中、ツングース語、満州語、女真語などの稀覯書と云われるものが32点以上、更に蒙古語、カルムック語、ブリヤート語、契丹文字等に関するものが55点、トルコ語、ウイグル語、キルギス語、トル

コマン語、ヤークト語等に関するものが42点等と、正に東南アジア諸語・アルタイ諸語の一大宝庫の観がある。他に朝鮮語、諺文が3点、極北諸語、とりわけアイヌ語、ギリヤーク語、チンクヂ語、カムチャッカ語等が4点、またビルマ語、シャム語（タイ語）、アッサム語、安南語（ヴェトナム語）、カンボディア語が7点、南島諸語（南方語、マライポリネシア語）就中、マライ語、インドネシア語、ジャヴァ語、タガログ語（フィリッピン語）等が15点もあり、ドラヴィダ語、コーカサス語のもの3点、セム諸語、シリア語等を含めて5点という珍しいものもある。インド諸語について云えばヴェーダ語、サンスクルット（梵語）、しったん学、およびパーリ語（プラクリット）等に関するものが24点以上もある。次いでイラン語（ペルシャ語）、オセット語、クルド語、パミール語、アフガニスタン語、バルチスタン語等が15点もある。他にアルメニア語、ヒッタイト語、トカラ語等のものが更に9点もある。ヨーロッパの言語については、英語学とも云うべき音韻・音声、文法・語法、語彙論、慣用語、作文・文体、読本・会話に関するものおよび研究・指導、辞典類をあわせて31点あり、ドイツ語学に関するもの4点、オランダ語、ノールウェー語、デンマーク語、スゥエーデン語をあわせ7点、フランス語学に関するもの9点、イタリア語学のもの6点、ロシア語学9点、ポルトガル語、ポーランド語等が4点、ギリシア語、ラテン語が6点等々となっていて、更にケルト語ありウラル語あり、ラップランド語あり、サマイエド語も含まれており、エスペラント語のもの15点もの多くがある。

文学に就いて云えば文学理論に関するもの2点、日本文学に関するもの3点、双書・講座の類1点となっており、中国文学に関するもの7点である。また東洋文化一般について云えばチベット文学3点、安南文学1点、インドネシア文学1点、満州・女真文学2点、蒙古文学17点、トルコ・ウイグル文学4点、アッシリア・スメル文学1点、インド諸語による文学、即ちヴェーダ・サンスクリット・パーリ語によるもの10点にもおよびイラン文学1点が追補される。欧州語のものとしては英文学に関するもの26点、ドイツ文学11点、フランス文学10点、イタリア文学2点、ロシア文学5点といった具合であり、ここでも亦、東洋語文学の宝庫とも云うべきでいずれも貴重書が多く稀覯書も数多く含まれていることを附言しておく。

なお、この稿は石浜文庫仮目録を中心にその概要の一端を紹介したもので、このほかにロシア語で書かれた東洋語東洋学に関する貴重な論文が相当多く所蔵されており、また、言語学、文法学等に関する古典に属する図書の殆んどすべてが、網羅されているのは勿論であることを断っておく。

（事務長　出口　安正）

石浜文庫について
―その整理を通じて

私が初めて故石浜純太郎先生の蔵書に接したのは昭和43年6月の頃である。以来その蔵書が本学の石浜文庫として受け入れられ、その整理にたずさわる事になった。この度館報に石浜文庫のことにつき何か書く様にとの依頼であるが、何から書いていいものやら、まとまりのないものになってしまったが、その点は十分ご了承ねがいたい。

まず石浜文庫について、その受入、整理の経緯と現状に少しふれておかねばならない。昭和43年6月に石浜先生の蔵書を委託されて、図書館新館書庫に入れてから、夏休みを利用しながら、ごく少数のアルバイトの人等とその蔵書リストの作成にとりかかった。その中途で、昭和44年1月以来学園紛争があり、昭和44年7月から2カ月間、全学封鎖の渦中にまきこまれ、一時この年の整理は中断せざるを得なかった。そしてようやく昭和44年10月以来その所蔵リストの作成にとりかかり、昭和45年3月、その完成により購入受入をおえた。この間所蔵リストの作成をしながら本の評価を、津田書店（大阪市西成区）の津田喜代師氏等に委頼し、その筋の専門家の意見や話しを聞く機会を得たこと、また目にふれることのない貴重な本の数々に接し得たことは私にとって、この上もない幸運であった。次いで昭和45年4月以降、分類、目録の作成と装備にとりかかり、昭和47年3月には、石浜文庫仮目録を作り（学内教官と一部のみ配布）、現在仮目録以外の雑誌、拓本、経本等、特殊資料の整理を続けている。これが現在までの整理の状況であるが、整理費がほとんどなく、学内の教官研究費の一部を充て、この種の整理にとっては常識では考えられない様な額で、細々と整理を続けている次第である。

次に石浜文庫の内容であるが、その蔵書は、昭和45年3月受入分は漢書 4,506部19,328冊、和書 4,547部 6,371冊、洋書 1,977部 2,294冊、計11,030部27,993冊と、第2次寄贈受入分、和書 2,011部、漢籍 273部、拓本 171部、洋書 1,358部、その他約 1,000部の資料（写真、カタログ、雑誌）である。前記45年3月受入分については、石浜文庫仮目録として、一応利用される状態になっており、現在第2次寄贈受入分につき、製本、製帙、写真補修など、目録の作成と並行して整理中である。

石浜文庫のもう一つの資料に、文書、書翰類がある。これは石浜先生の人柄、それをとりまく交友関係、学界などを知る上で貴重なものである。その中にはN．ネブスキー氏との交信を通した西夏語の研究の輪郭などが、窺い知られるであろうし、大阪の静安学社の先生の活動が浮彫にされることになるであろう。また先生と縁の深い淡路関係の資料も少なくない。

次に石浜文庫の資料について、若干の紹介をしてみよう。

目録では、各所の展観目録、例えば亀田次郎氏所蔵泰西人の日本語研究書展観目録（大谷大学図書館、昭和29年）、亀田氏貯春楼蔵本節用集目録（大阪静安学社）、大蔵会展観目録、高木利太遺書古活字版展観目録、内藤家所蔵古刊古鈔仏典目録（昭和15年）など、また各種の目録、例えば、仏教徴古館列品目録、和泉郷土文庫目録、足利尊氏寄進願経現在目録、東京大学所蔵チベット文献目録など、数を上げたらきりがない位、豊富である。また先生の蔵書の中で A. Stein, S. Hedin, Le Coq, M. Klaproth, B. Попов、など東洋学関係の学者の著作が網羅的に蒐集されているが、おどろくべきことは、これらの著作と関連して抜刷や雑誌が実に欠如なく入っていることである。例えば前述の A. Stein が集めた敦煌出土古写仏典のロードグラフの解説目録、略目、Bsitish Musium所蔵の敦煌未伝稀覯仏典白写真出陳略目などである。

その他東洋語関係の文献、特に H. A. Jäschke, F. F. Schmidt のチベット関係、G. J. Ramstedt, A. B. Грерьенщиков, J. Klaproth, H. H. Поппе の満州、ツングス諸語、K. O. Голстунский や J. Kowalewsky のモンゴールの辞書などがある。これらはいずれ蔵書目録として紹介されるので割愛したい。

次に雑誌、拓本、写真について少しふれてみたい。拓本については近々マイクロとして貴重な部分 1,570cut に集録したが、その中で、漢、満、蔵、蒙、梵、西夏の六体の合壁、漢、蔵、蒙、西夏の四体の拓本がある。これらと蒙文、梵文、蔵文による経典、西夏語の経典、写真など石浜文庫以外では所蔵しない貴重な文献が存在する。特に石浜先生とN. ネブスキー、王静如等と文通を通して得た西夏語関係の資料は未公開のものが少なくない。雑誌については、現在整理中であるが、文部省学術雑誌総合目録：人文科学和文編1973年版の東洋学関係、仏教関係、近畿地方の雑誌などに、ほとんど所蔵の少ない部分が大体創刊号より昭和35年位までの間が所蔵されていることである。また中国語の雑誌は入手される範囲でほとんど欠如することなく所蔵されている。これは本学の雑誌の所蔵の少なさを補ってあまりあるものであろう。ロシア語の雑誌、及び抜刷りについてはその質量においておどろくべきものがある。特に St. Petersburg時代の1850～1910年位までの Записки Ин-т Вост. Акад. Наук СССР. Известия, はいうに及ばず、シベリア、満州、サハリン（樺太）、東・西シベリアなどをとり扱った抜刷が実に多いことである。和雑誌の抜刷、別刷は先生に直接著者が寄贈してきたものが非常に多く、前述の雑誌の東洋学を中心とした抜刷が網羅されることになる。これは先生の学界での活動を知る上で貴重なものである。更に図書館人としてみらわなければならないことは、先生がもらった資料について、いつ、だれが、どこで寄贈を受けたかを自身の手で書かれていることである。それがどんな小さな資料についても徹底されていることに敬服せざるを得ない

なお、石浜先生、王静如の著述の主なものお掲げておく。

○石濱純太郎『北堂書鈔の舜典孔傳』
○ニコライ・ネフスキー、石濱純太郎
『于闐文智炬陀羅尼經の斷片』
○石濱純太郎『故バルトオルド先生』
○石濱純太郎『滿洲語譯大藏經考（續）』
○石濱純太郎『蒙文讚頌統會目録一蒙文丹殊爾總目１』
○石濱純太郎『蒙古源流札記』
○石濱純太郎『西夏語研究の話』
○石濱純太郎“Si-hia-Tangutica I”
○N. ネブスキー、石濱純太郎
『西藏文字對照西夏文字抄覧』
○聶斯克（Nicolas *Nevsky*）『西夏語研究小史』
○石濱純太郎『富永謙齋先生小傳』
○石濱純太郎『チョオマ先生の話』
○石濱純太郎『回鶻文普賢行願品殘巻』
○王静如『西夏文漢藏譯音釋略』
○高本漢著、王静如譯及註
『中國古音（切韻）之系統及其演變（附國音古音的比較）』
○王静如『論阻卜與韃靼』
○王静如
『跋高本漢的上古中國音當中的幾個問題並論冬蒸兩部』
○王静如
『中臺藏緬數目字人稱代名詞語源試探』
○王静如『釋定海方氏所藏四體字至元通寶錢文』
○王静如『契丹國字再釋』
○王静如『就元祕史譯文所見之中國人稱代名詞』
○王静如
『佛母大孔雀明王經龍王大仙衆生生名號夏梵藏漢合璧校釋』

（整理係長　布川　嘉佑）

Quarterly Check-Listシリーズ

——二次資料紹介シリーズ(2)

前回紹介しました Archives 69と同様、その存在が知られずあまり利用されていない二次資料として、今回はやはり同じく逐次刊行物である Quarterly Check-List をとりあげてみます。

Quarterly Check-List そのものによる説明では、これはカレントな図書形態の資料を収録した国際的な主題書誌ということになります。但し国際的と申しましても、被収録資料は西洋語で書かれたものに限られます。いいかえますと、その特色は第一に年四回発行されて日々の学術出版の情報を逐次的にとらえるというカレントな性格をもち、

第二に雑誌などの定期刊行物を除いて単行本のみ（モノグラフ、パンフレット、分冊を含む）が収録されており、第三に世界各国で出版される資料を対象とする人文・社会科学諸分野の主題別の書誌であるということになります。

書誌と申しますと、一方では単独で遡及的な文献の調査にたえうる書誌も必要ですが、この編集には通常相当の時日を要し、被収録資料の発行時点とそれを収録する書誌の発行時点の差、いわゆるタイム・ラグが大きくなる傾向があります。その為書誌として機能を全うするには、長期の年月をカバーする基礎的な書誌と、その上にそれを一定の間隔（通常1～5年）で補っていく書誌のほかに、さらに短い期間で毎日の知的生産の情報を追跡していくカレントな書誌（通常週刊～季刊）が必要になってきます。Quarterly Check-List はこの最後のタイプの書誌に属し、タイム・ラグの短いことが大きなメリットの一つとなっているようです。

Quarterly Check-List が雑誌論文には関与せず、単行本のみを収録するのは、一つは雑誌論文を収載するのに多くの時間・人員を必要とするためとも考えられます。また人文・社会学分野では単行本が最も主要な情報源の座を占めるという考え方かもしれません。しかし人文・社会科学にあっても雑誌論文のウェイトが上昇し、分野によってはむしろ単行本より比重が大きいように思われます。いずれにせよ、書誌を提供する図書館としては、雑誌論文をカバーするために、分野によっては雑誌論文のみを対象とする書誌を別に用意するとか、あるいは図書館独自で雑誌の目次を集成したコンテンツ・シートを発行するとかの方法を構ずることも必要になると考えられます。

また西洋語で書かれたもののみを対象としていますので、この面でもなんらかの補いが必要な場合もあるでしょう。

書誌はこのように種々の書誌の組合せによってはじめて絶大な効果を発揮すると申せましょうが、それだけにこれらの購入は周到に練り上げられた資料収集方針の下に慎重に又相互関連的になされる必要があります。

次に図書館で購入している言語学、東洋研究、民族学・社会学の三種類の Quarterly Check-List の各々について、特に本学にとって関連深い Quarterly Check-List of Lingnistics を中心に紹介します。

1. Quarterly Check-List of Lingnistics（1969年から所蔵）

語学に関する資料であっても、普通の入門書、辞書、語学学習用の名文集は除外されており、学術的な資料を収録対象としているようです。

書誌が、明示された収録範囲の中でどれだけ欠落なく対象となる資料を収録しているかという網羅性の観点は、書誌にとって一つの重要な要素ですが、この点から1973年分（Vol. 16）の Quarterly Check-List of Lingnistics を検討してみましょう。Vol. 16の総収録点数は388点（ちなみに Vol. 14：290点、Vol. 15：330点）ですが、その出版国別内訳点数をその国の語学関係出版点数（1972年）と比較する＊と次のようになります。

出　版　国	収録点数（A）	出版点教（B）	（収録比率）A／B
西ドイツ	116	1,609('71)	(7.2%)
アメリカ	84	491	(17.1%)
オランダ	65	2,072	(3.1%)
スウェーデン	26	429	(6.0%)
イギリス	17	701	(2.4%)
フランス	17	587	(2.9%)
スペイン	17	830	(2.0%)
イタリア	13	360	(3.6%)
東ドイツ	11	259	(4.2%)
デンマーク	9	215	(4.2%)
ベルギー	8	443	(1.8%)
スイス	6	234	(2.6%)
インド	4	310	(1.3%)
ノルウェー	2	273	(0.7%)
オーストリア	2	124	(1.6%)
オーストラリア	2	86('71)	(2.3%)

＊Vol. 16 に収録されている資料388点のすべてが1972年の刊行ではなく（1972年刊行は60%、1973年は17%、残りは1971年以前）、したがってこれらの数字は正確に対応するものではないが、この場合さほど影響を与えないとみなされうるであろう。

Quarterly Check-List はアメリカで発行されている資料ですから、アメリカについては学問的な単行本はほぼもれることなく収録されていると思われ、現に上表の通り出版点数に対する収録点数の比率は最も高く（17.1%）なっています。この比率に比べると他の国の収録比率は極度に低くなっていますが、これらの国々でも学術的な出版の比率がこの表にあらわれた数字ほどアメリカより低いとは考えられませんし、又これらの国々で出版される単行本はほとんど西洋語で書かれているでしょうから、アメリカ以外ではやはり収録すべきものが多数欠落していると思われます。

選定書誌は別として、利用する立場からは、収録範囲の広さより、むしろ限定的な範囲でも、その限度内は落ちこぼれがないという書誌の方が頼りになると考えられます。この点はカレントとなのる書誌においても同様でしょう。

世界各国で出版された単行本を収録すると自己規定していますが、上表で見る限り、実際はアメリカとヨーロッパ諸国を中心としているようです。

Quarterly Check-List シリーズには各巻の最終号に著者・訳者索引がつけられていますが、個々の号の中での文献の配列も著者順になっていますので、索引か配列のいずれかを主題順にするとかの工夫がほしいところです。

2. Quarterly Check-List of Oriental Studies
(1968年から)

収録する資料の主題の範囲は、東洋の政治、経済、社会、文化に関するものであり、地域の範囲は、近東、中央アジア、インド、パキスタン、極東、東南アジアとなっています。

収録点数は1973年（Vol. 15）の場合755点（1971年：523点、1972年：557点）です。

Oriental Studies も収録文献の配列は著者順ですが、Vol. 16（1974年） から各文献の頭に次のような地域・時代を示すアルファベット記号が与えられて、迅速に検索できるよう配慮されています。

a. 古代中東、聖書研究
c. 中央アジア：モンゴリア、カザフスタン、キルギジア、タジキストン、トルクメニスタン、ウズベキスタン
e. 東南アジア本土：ビルマ、カンボジア、ラオス、タイ、ヴェトナム
f. 極東：中国、香港、日本、朝鮮、台湾
g. アジア一般研究
h. ヒマラヤ地域：ブータン、ネパール、シッキム、チベット
m. イスラム帝国後の中東、北アメリカ
s. 南アジア：アフガニスタン、バングラデシュ、インド、パキスタン、スリランカ

この為非常に検索し易くなりましたが、同じ労力ならば、本文の著者順配列に代えて上記の分類項目別にグルーピングする方がより効果的に思われます。

3. Quarterly Check-List of Ethnology & Sociology
(1969年から)

カバーする主題の範囲は、社会・文化人類学、社会学、民族誌学、犯罪・人種問題・アルコール中毒・麻薬中毒等の社会問題とされています。

収録する文献は Vol. 16（1973年）で594点、Vol. 15では370点、Vol. 14では323点となっています。

故石濱純太郎先生年譜略

明21・8　大阪市北区堂島において父豊蔵、母平山氏カヤの長男として誕生
明34・4　大阪府立市岡中学に入学、同校第1回入学生。同期に小出楢重、田宮猛雄、信時潔の諸氏あり
明41・8　第一高等学校において東京帝国大学受験す。試験の結果の発表なきまま坪内逍遥につき英文学を修めんと思い、早稲田大学受験を企つるも時既に遅くして果さず。東京帝国大学文科大学支那文学科に入学し岡田正之教授につく。8月の受験者40数名中、理科亀田豊治朗氏とのみ許可さる。
明43・4　家督を相続す。丸石製薬合名会社社員となる
明44・7　東京帝国大学卒業。卒業論文「欧陽脩研究」(漢文）同期の国文学科卒業生に Senge Elisséeff 氏あり
大4　この年、西村天囚氏の誘により大阪の文会「景社」に入り、長尾雨山、籾山衣洲、武内義雄らの諸氏と相知る。
大5・7　宇治花屋敷において、京都の文会、麗沢社と景社との第1回連合会あり
内藤湖南（虎次郎）、狩野君山（直喜）、青木正兒、岡崎文夫、神田喜一郎、小島祐馬、富岡謙蔵、佐賀東周、那波利貞、福井貞一、藤林広超、本田成之らの諸氏と初めて会う。
大11・4　大阪外国語学校蒙古語部へ選科委託生として入学
大13・3　大阪外国語学校第二学年修了
大13・7　京都帝国大学教授内藤虎次郎氏に随伴し、内藤乾吉氏と共に東洋語書籍調査のため、ヨーロッパにむけ神戸を出帆す
大14・2　ヨーロッパより帰朝す
昭2・9　浅井慧倫、笹谷良造、高橋盛孝、Nicholas Nevsky の諸氏と静安学社を発起し幹事となる
昭11・6　静安学社幹事を解かる
昭17・2　大阪言語学会を創立発会す
昭28・11　日本西蔵学会会長に推選さる
昭29・11　大阪の生覚を顕彰し大阪の教育の振興に貢献したる功績に対し、大阪府より「なにわ賞」を受く
昭32・3　著書、支那学論文等により関西大学より文学博士の学位を受く
4343・2　永眠す

なお、大正15年以降、関西大学、大阪高等学校、龍谷大学、京都大学、大阪外国語大学（専門学校を含む）、天理大学、帝塚山学院短期大学で教鞭を執る。

大阪外国語大学附属図書館〈館報〉
発行　附属図書館
No. 2　1975. 2
大阪市天王寺区上本町八丁目
電話　(06) 772—1271
印刷　セイエイ
大阪市城東区蒲生町2-1